

コミュニケーション力を育てる母親支援

～週の記録を通して～

佐藤 幸子

乳幼児教育相談において、母親支援は乳幼児のコミュニケーション力の育ちの基盤となるものである。母親の心理的な安定を通して、乳幼児の心身の成長や、周囲の人や物とのやりとりの力が促されていく。母親支援の中で特に大事にしているのが、母子間の共感関係の成立への援助である。母子間の心の通い合いを通して豊かな感情が生まれ、周囲の人や物事への興味、関心へとつながるからである。このような心の育ちは、声、表情、動作、指さし等での発信となり、身近な人との応答関係につながっていく。今回は、「週の記録」を通して具体的な事例を挙げ、母親支援の意義について考察を行う。

【キーワード】 母親支援 記録の読み取り 共感関係の成立 関わりとイメージの成立

1 はじめに

母親支援は、聴覚に障害をもった乳幼児の言語発達を含む全体的な発達を促す為の根幹となるものである。母親支援は、本来、日々の様々な活動や場面を通して母子の様子をつかみながら、形式こだわることなく臨機応変に対応されなければならないものである。

個々の母子のケースに合った具体的な支援内容については、グループ担当者の間でも、常に共通に認識されながら細やかな配慮の元実践されていかなければならない。

今回は、母親から提出された「週の記録」の記述内容に対する担当者からのコメントや、補足の意味での直接的な口頭でのアドバイスも含めながら、乳幼児担当者として大事にしていかなければならない観点を整理、考察していきたい。

2 「週の記録」を取り上げた意図

週の記録は主に3つの項目に分かれている。

①「週の中で心がけたこと」②「聞こえの様子や補聴器関係について」③「普段の生活や遊びの中での母の気づきややりとりの内容」である。

母親は各項目に応じて、日々の様々な出来事を通

しての、子どもの様子や母親自身の心情や家族の事等、文字を通して自由に表現してくる。

母親からの実生活に即した記述内容は、どんなに短く、シンプルな表現であったとしても、今後の母子への支援の方向の見極めにおいて、示唆深い内容が多い。担当者は、母親の心情や意図を的確に読み取りながら、様々な角度で的確にアドバイスをしていかなければならない。

その際、現在の子どもの全体的な発達も視野に入れながら、コミュニケーション力の育ちに向けて、母親に対して分かりやすい説明をすることも、常に念頭に置いておかなければならないことである。担当者の記述内容の一言や補足のつもりでのちょっとした言い回しで、母親気持ち安定したり急に不安定になったりすることもよくあることである。また、アドバイスの内容や伝え方の工夫によって、母親が子どもの行動をより深く理解できるようになり、好ましい関わりにつながっていく様子も日々実感される。

今回の「週の記録」を通しての、見直し、考察は、支援者自身にとっての学びとしての意義も大きい。母子の普段の何気ない様子から、細やかな読み取りをしながら、「何を」「どう」「どのタイミングで」「ど

んな風に」「何を大事にして」支援するのかわを確認できたらと思っている。

3 事例の取り上げについて

母親からの記録内容は、それぞれの項目に応じて、心情、背景、母子関係等多岐にわたる為、担当者側のこまやかな読み取りが大事な点となる。

今回は、事例を一つの事例に絞り、乳幼児期のコミュニケーション力の育ちにおいて、どの事例にも共通する大事な事を浮き立たせたい。

4 「週の記録」からの抜粋

(1) 「週の記録」から「母親の記述」を抜粋

—「普段の生活や遊びの中での気づき」より—

「ケーキやさんに行くと、ショーケースの前に立ち、ケーキを一つ一つ指さして、笑って祖父の顔を見ていた。普段、そんなに指さしをしないが、本人なりに興味をもったものに対して、指さしをする姿を嬉しく思った」—母— (1歳6カ月、男児)

(2) 担当者からのコメントの内容の抜粋

Aちゃんのちょっとした仕草をお母さんがよく捉えていますね。

美味しそうなケーキが沢山並んでいて、しかも、隣には大好きなおじいちゃんがいる。

おじいちゃんの顔を笑顔でのぞくAちゃんの様子が目に浮かぶようです。

「ねえ、ねえ、おじいちゃん、ケーキ、いっぱいねー、おいしそうねー、おじいちゃんもたべたい？」等々、Aちゃんの心のおしゃべりが聞こえてくるようです。

おじいちゃんも、きっと、顔一杯の笑顔や表情、動作、声、言葉等で、Aちゃんと素敵なやりとりをしたことでしょう。

「僕と同じ気持ちになってよ！」「一緒に、ワクワクしたり、驚いたりしてよ！」というAちゃんの気持ちの育ちが「指さし」となって現れています。

普段からの、おじいちゃんとの感情の交流が、きちんと視線を合わせたり、顔をよくみる姿につながってきているのだと思います。ゆたかな感情や身近な人との信頼関係がよく育っていますね」

(3) 母親と共に週の記録を見ながら、口頭で補足として伝えた内容

○指さしは身近な人に対して「共感を求めるサイン」であること。

○Aちゃんの自然な表現やおじいちゃんとのほのぼのとしたやりとりを、お母さん自身が笑顔で共感できていることも素敵なことであること。

○この場面を通して、「身近な大好きな人との心地良い共感関係が普段から培われていること」がよく分かること。

○Aちゃんにとっての「指さし」は、「わくわくした気持ち」「ハッとした気持ち」を大好きなおじいちゃんに分かってもらいたいというAちゃんなりの「ことば」であること。

○人を関わりたいという「意欲」は日常生活の様々な場面での共感関係を通して育まれていくこと。

○このような意欲の育ちによって、周囲の様々な物事や出来事に対してのゆたかな感性が生まれ、やりとりの力が育っていくということ。

○ことばを教え込む意図が強くなると、「心の響き合い」「共感関係」が成立しにくくなること。

○大好きな人だからこそ、子ども自身から心を開けることにつながり、その人のちょっとした仕草や表情や動作などから情報が取り入れられ、それが子どもの心にイメージ化されていくこと。

○様々なことに対するゆたかなイメージが、ことばの育ちにとって、大事な基礎になること。

5 考察

指さしは、1歳台のこの年齢の子どもによく見られる行動である。一見何気ない仕草ではあるが、コミュニケーション力の育ちにとって、とても大事な行動であり、母親支援においても、指さし行動の読み取り方や応じ方、関わり方を十分に知ってもらいたいと思っている。

我が子に聴覚の障害があることで、ともすると、母親の意識の中で、言葉の出現の方に力が入り、子どもとの心地よい情緒的な関わりの大切さが見落とされたり、子どもの細やかな心の動きの素晴らしさが感じられにくくなったりことがある。

子どもは言葉を覚える為に、指さしをしているのではない。自分のちょっとした心の動きを、周囲の人に共感してもらうことの嬉しさ、満足を求めているのである。「あっ！これねー！わかる、わかる、うれしいねー、たのしいねー・・・」などの大人からの心からの応答は、こどもの心を満たし、更なる表現や、相手からの応答を期待して待つ姿勢につながっていく。

本来言葉は、人と人との間で、自分の感覚や感情、人や物のイメージを相手との関係で「分かり合える」ことを前提に育っていくものである。自分と同じ気持ちや感覚（五感の動き）やイメージを身近な人と共有できることは、日々の生活をより楽しくゆたかに彩り、生きる意欲につながっていく。これは、幼児に限ったことではなく、大人自身の経験に置き換えても同じことである。「人との関係での意味の通じ合いや気持ちの共有の経験」は、乳幼時期から大事にされなければならないことであり、幼稚園入学後にも引き継がれながら、言葉での確実な分かり合いに繋がっていくものであると思われる。

6 まとめ

「共感関係」は子どもとの関係のみならず、「母親と担当者との関係」にも大事な意味合いをもつ。子どもの健やかな心や身体の成長、コミュニケーション力や言葉の発達にとって、母親自身が周囲の人との心の響き合いが楽しめる気持ちや状況をもてるよう細やかな支援を続けていきたい。

（付記）本研究は、平成25年、第47回全日本聾教育研究大会（愛知大会）の「早期教育1（乳幼児）」の研究分科会で筆者が口頭で発表を行った内容に加筆したものである。

